

---

# ICCS 国際シンポジウム趣旨説明

## 加々美光行

〈愛知大学 COE プログラム ICCS 代表〉

ようこそいらっしゃいました。今日から3日間、皆さまにお付き合いいただきます。このプログラムは、広大無辺な夢を追うプログラムです。普通のシンポジウムとは異なります。いかに普通のシンポジウムと異なるかということ、まずここでご説明申し上げたいと思います。確かにここにお集まりの方は、中国学の各専門分野の一級の先生方です。しかし、討論の中心は、副題にありますように新しい中国学というものを作り上げること、そのことで世界の皆さんがひとつに手をつないで、そしてこれから後、どのくらいの時間がかかるかわかりませんが、少なくとも10年ほどの時間をかけて、まったく新しい中国学というものを、方法的に内容的に構築しようというかなり野心的なものであります。こうしたプログラムを本学の愛知大学の教師を中心として始めることについては、かなり冒険であると、そんなことが果たして可能か、そもそも今回のシンポジウムですら、これだけの人々を集めて開催できるだろうか、という危惧が相当に聞かれました。しかし私どもの使命感は、この困難を越えて今回のシンポジウムを実現させましたし、今後もまたその目標に向かって邁進するつもりであります。

では一体、私たちの夢はどのようなものなのでしょう。例えば、国際政治学会、国際平和学会など、さまざまな「国際」の名前のつく学会が世界中にございます。しかしながら、地域研究を1つの分野とする国際学会は、今日まで存在してきませんでした。なぜかと言いますと、地域研究にはまず学問的な方法論、英語で言えば *discipline* ですが、*discipline* に共通の方法というものが確率していない。あるいは各個人においては、ここに在席の、今回報告をしていただく先生方にも、そうした地域研究の方法を模索し、論文を発表した方もございます。しかしながら、それが結実して、統一した世界共通の方法論、*discipline* が確立したとはなお到底言えない状況にございます。例えば中国学について申し上げますと、中国の国内で中国の学者、研究者が行っている自国研究について言えば、それは文字通り中国学に値するわけですが、この自国内で行われている中国学と、それから海外で、私どもの日本、あるいはアメリカ、ヨーロッパ、また東南アジアといった地域で行われております外国研究としての中国学の間には方法的にかなり本質的な違いがあります。中国の外で外国研究として行われている中国学では、実にさまざまな方法が駆使されている、というよりも、*discipline* の分野で言えば、例えば経済学者が中国経済を、政治学者が中国政治を、社会学者が中国社会学を、つまり別の言い方をすれば、中国学以外のすでに既存

の十分に熟成した、成熟した *discipline* を方法として用いている、というのが外国研究としての中国学の現状であります。したがって、そこには文字通り、プリズムが、光がバラバラに分散するように、収斂していく光というものはないわけです。さらに、アメリカにおける中国学の研究と日本における中国学研究、あるいはイギリスにおける、東南アジアにおける中国学研究の間には、各国それぞれのあい異なる視点、視角が抜き難く存在しています。実はこのような状況は、他の途上諸国研究にも見られるものです。地域研究には、大きく分けて2つの分野がありまして、1つは途上諸国研究、もう1つは先進国の研究です。つまり、国別研究が地域研究の基本なのですが、自ずとそこには、発展途上国、途上諸国と、それから先進国の研究対象では、方法的にもさまざまな違いがある。とくに重大なのはこの地域研究には、オリエンタリズムに代表されるある西方中心主義といいますか、あるいは欧米中心主義といいますか、そうした方法上の偏りが顕著に見られてまいりました。サイード博士 (Edward W. Said) とかコーエン博士 (Paul A. Cohen) が、このオリエンタリズムについて過去15、16年の間、取り上げてきたことは皆さんご承知の通りです。しかしながら、このおふたりの努力にもかかわらず、今日私が見る限りでは、決してオリエンタリズムの傾向、つまり西方中心主義あるいは欧米中心主義的な方法的ゆがみは、今日正されているとは到底言えない状況にあります。したがってこれを克服するのに、個別的な議論をやっていたのでは全然解決策にならない。世界中の研究者、学者が一堂に会して、その方法的な問題を各分野、もちろん方法自体を論じるセッションが私どもの今回のシンポジウムにはございますけれども、この方法自体を議論しない政治や経済や文化や環境のセッションにおいても、その方法的問題を常に考慮に入れて議論していただきたい。なぜかと言いますと、先ほど申し上げましたように、政治の分野では、自ずと政治学の *discipline* が用いられ、この政治学の *discipline* はおおむねアメリカを中心とする欧米の学問的 *discipline* に他ならないからであります。また、経済学の分野も同様であります。果たしてそのままそうした現状を維持することでよいのか、というような問題もお考えいただきたい。それと同時に、従来の *discipline* に基づく研究が、どのような問題を孕んでいたか。アポリアという言葉を使いました。アポリアというのは日本語で言えば難題ということですが、難題を一つひとつ取り上げていただきたい、というのがこのシンポジウムの最大の趣旨であります。無論、先ほど申しましたように、こうした問題は決して中国学の分野だけで見られるわけではありません。途上諸国研究、例えば、アフリカ研究、南アジア研究、あるいは東南アジア研究、ラテンアメリカ研究等々でも、まったく同様の問題が現在、存在しているわけであります。私のペーパーの中にもございますが、アメリカは今日、イラク戦争において、戦争自体は勝利し、そしてご承知のように、イラクに対する軍事占領が始まったわけですが、その際、多くの歴史文物が略奪され、篡奪され、どこかに奪われていった。アメリカの兵士たち、軍人たちがその篡奪、略奪に加わったという事実がございます。このことが示しておりますように、アメリカのあるいはイギリスのイラク研究は、現象的に見た場合、明らかにイラク軍事占領にとっては何らの力にならなかった、いかなる力も持

---

ち得なかったということが明確にわかります。この点は、アメリカの極東司令部が第二次世界大戦後、日本に対して行った占領政策と大きな違いがあります。アメリカのマッカーサー総司令官を中心とする極東司令部は、日本の民主化を見事にやり遂げましたし、さらには、日本の戦後復興の基礎を築いたとも言えます。無論、マイナス面もたくさんございましたけれども、プラス面が占領政策の中にあったことは確かであります。今次のイラク占領と大きく違うのは、日本における歴史文物を極東司令部は慎重かつ周到に保護したということです。このことは実は、極東司令部を支えていた欧米の日本研究が、確かなお十分な基礎はもっていなかったかもしれないけれども、占領政策を成功裏に支えるだけの内容をもっていたということです。それは明らかに、日本が明治維新以降の近代において、欧米的な近代化を脱亜入欧的にやり遂げて列強と肩を並べる大国、つまり欧米先進諸国の列に並んでいたことと無縁とは思われません。つまり日本が欧米先進国の列に加わっているがゆえに、日本に対する研究は確かにオリエンタリズムの傾きはあったでしょうけれども、それを克服するだけの認識がそこにあったということです。あるいはそれを作り出したということです。しかしながら今日、中国を含む、中国を果たして途上諸国と云ってよいかどうか、経済の面においては明らかに先進国の列に加わりつつありますけれども、文化的、学問的には、多くの人がお、途上諸国と見ているといわざるを得ない。途上諸国と欧米経済先進国を二重基準で見ると偏り、そこに世界の中国学のゆがみの根源の一つもあると言えるのです。

これらさまざまな難題、アポリアを、このシンポジウムにおいて、世界から集まった各研究者、学者に討論いただきたい。決してこの1回ですべてを解決するつもりはございません。毎年同様のシンポジウムを開催する覚悟しております。ぜひぜひ、このシンポジウムを通じて、さまざまな問題、後につなぎ得る問題を提起していただきたいと思います。どうもありがとうございました。